

# 沫雪の ほどろほどろに 降り敷けば

## 平城の京し 思ほゆるかも

大伴旅人(巻八・一六三九)

今年は例年になく暖かい初冬を迎えたように思います。師走になり、今年一年を振り返る話題も多く聞かれます。冬の季節に静かに物思いにふけりたい時、私は今日の一首を思い浮かべます。

この歌は、大伴旅人が大宰府の長官(大宰帥)として、筑紫国に赴任している時に詠まれた歌です。大宰府は当時「遠の朝廷」と呼ばれ、九州及び外交に関する政治・軍事の重要な拠点でした。旅人が大宰府に赴任したのは60歳を過ぎた晩年のことで、当時としてはかなりの高齢であったと思われまふ。重要な職を任せられたとはいえ、旅人の心中には、この大宰府赴任によってもう奈良の都には戻れないかもしれない、という思いが去来していたものと想像されま

やまと  
万葉がたり

この歌の題詞には、「大宰帥大伴卿の冬の日に雪を見て京を憶へる歌一首」とありまふ。旅人が詠んだ雪の歌の多くは、白梅の花との取り合わせの美しさを詠むものです。しかし、旅人はこの歌ではあわ雪がまだらに降り続ける景のみを切り取ります。筑紫が奈良

よりも雪が少なかったためでしょうか、不意の雪にふと故郷のことが思われたのでしょうか。華やかな奈良の都が薄化粧をした風景を、旅人はどのような気持ちで思い返したのでしょうか。この一首では、高官に昇りつめ

の奈良を詠むのは、旅人のように都から遠く離れた人びとの歌が多数を占めます。「故郷は遠きにありて思うもの」という産屋星の言は、「万葉集」から続く人間の普遍的な情なのかもしれません。

平成最後のお正月、みなさんも旅人のように、静かな物思いの時間を過ごしてみませんか。

(県立万葉文化館主任 研究員・大谷 堯)

次回回は1月9日

平城の京が思われることよ、